

# 佐藤春夫の台湾滞在に関する新事実 (三)

——新資料にもとづく旅行日程の復元——

河野龍也

## 一 森丑之助作成の旅行プラン

作品集『霧社』（一九三六・七、昭森社）の収録作を代表とする佐藤春夫の「台湾もの」は、一九二〇（大正九）年夏の三ヶ月余りの台湾滞在期間中、九月中旬に打狗（現高雄）の東熙市（ひがしきい一八九三〜一九四五）の家を出発し、台湾の山岳地帯（当時のいわゆる「蕃地」）や中部の諸都市を経て台北に到達する約二週間の縦断旅行に取材したものが大部分を占める。『霧社』のあとがき（「かの一夏の記」）によれば、この縦断旅行を勧めたのは、台湾原住民研究の草分けとして知られ、丙午の号を持つ森丑之助（一八七七〜一九二六）であり、森が作成した日程表も文中には引用されている。

その原本を含む一〇通の森書簡が、現在新宮市立佐藤春夫記念館に保管されている。すでに写真版に翻刻を添えた書簡集も刊行されていて、春夫に対する森の濃やかな配慮を具体的に知ることができる。次に掲げるのは、その書簡集に見える日程表原本の内容である。「かの一夏の記」と比較してみると、春夫の引用が原本に忠実だったことも分かる。

### 旅行日程表

九月八日 打狗出発 嘉義泊り（ホテル）

嘉義附近、北港媽祖宮見物 営林所訪問

九日 嘉義発 交力坪乃至奮起湖泊

十日 阿里山着泊 （阿里山事務所官舎泊）

- 十一日 阿里山滞在 附近山林視察 新高山の遠望  
(宿泊前同様)
- 十二日 阿里山発下山 途中一泊
- 十三日 嘉義発 日月潭泊(涵碧楼)
- 嘉義を一番列車に発し二八水より乗換浦仔より先ハ軽便鉄道 新年庄ヨリ歩行約十町
- 十四日 日月潭発 埔里街泊(日月館)
- 日月潭附近を見物して午後出發 新年庄より埔里街へ軽便鉄道
- 十五日 埔里街発 霧社泊(霧ヶ岡俱樂部)
- 午前中に霧社に赴き午後は附近蕃社視察
- 十六日 霧社発 能高山泊(駐在所宿舍泊)
- 能高山は此方面の中央山脈の突尖にして標高一万千尺 道路可良 宿舍設備比較的完全
- 十七日 能高山発 埔里社泊(日月館)
- 十八日 埔里社発 彰化泊(彰化ホテル)
- 十九日 鹿港見物 台中泊(春田館)
- 二十日 台中見物 夜行にて台北へ
- 以上にて十二日を要す見込 前文の日割より短縮しましたが途中此外に御立寄になる様ならば適宜御追記願ます

この日程表は、台北の森から九月二日に差し出されたものである。同封の書簡には、(若し此天氣が大暴風雨に変わらなかつた際は途中の故障はなからうと思ひますから八日頃より御出發なさつては如何でせうか)との言葉が見える。八月三一日以来、台北測候所は石垣島南東海上を北西に進行中の台風に対する警戒を呼びかけていたが、二日の段階では進路を北に変え台湾から遠ざかるという樂觀的な予測を持っていた。ところが、台風はまさにこの日の夜から三日にかけて台湾全島で猛威を振るい、四日未明には台北橋が崩落したほか、各地で河川の氾濫が相次ぎ、甚大な被害がもたらされた。

この台風の影響で、春夫と森の打合せにも想定外の混乱が生じた。いわゆる「蕃地」(山地原住民の居住地帯)を旅程に組んだこのプランの場合、事前に「入蕃手続」を要し警備員の同行が必要だった。その手続を円滑にするため、森は総務長官下村宏(一八七五〜一九五七)を動かして關係各署に指示を与えておこうとしたのである。そのためには、事前に行動予定表を下村に渡す必要があった。森のプランの末尾に(適宜御追記願ます)と見えるのは、春夫に確定版の返送を求めていたことを示す。これに対して春夫は、(八日嘉義出發)の日程表を四日付けで投函したようだが、恐らくは水害のため遅配となり、一〇日朝にようやく

く森のもとに届けられた。すでに出発予定日を過ぎ、下村に渡す意味がなくなってしまったのである。

ちようど九月一日に台湾地方官官制が改正され、一〇月一日に行政区分を五州二庁三市四七郡二六三街庄とする地方自治制度施行を目前に控えたこの時期、各地の準備状況を視察するため下村長官の巡視が計画された。一〇日に即日返事をしたためた森はこれに触れ、十三日下村長官は台北発南中部に巡視されます、其途次十六日高雄へ行かれますから貴地にて御面会の上親しく長官と御打合せ相成て後御出発なさつては如何です」と春夫に勧めている。この一〇日の書簡からは、森が春夫に電報を打っていたことも窺われるが、それを見ずに春夫が出発していたとしても、交通杜絶のため引き返すしかなく、電報も書簡も打狗で手に入ったに違いない。しかし、一日の新聞には下村の巡視延期が報じられており、森の提案した打狗での下村・春夫の会見は結局実現しなかった。

それでは、春夫が打狗を出発したのはいつなのだろうか。惜しいことに、残された森書簡からこれを知る手がかりはない。一方の春夫から森に宛てた書簡が未発見の現状では、実際の旅程の最も信頼すべき情報源は作品である。その意味で、邱若山による推定表は、森の書簡の公開以前に作成されたものながら、春夫の複数の作品からあらゆる時間的

記述を取り出し、そこに描かれた出来事を細心の注意で時系列上に並べ直した労作として、「台湾もの」の理解の伴侶であり続けてきた。

だが、最近になって私は、春夫の台湾における行動が記録された幾つかの客観的な資料が存在することに気がついた。資料の分析によって分かってきたのは、春夫の「台湾もの」が出来事の内容や前後関係については抜群の明瞭さを持つているのに対し、日数を数えたり暦に結びつけたりする二次的な作業に不正確さがあるということである。はっきりした日付ほど出来事の連続性に混乱を与えており、信憑性が疑問視されるという厄介なねじれを持っている。改めて外部の記録に基づく行程表の再検討を必要と考える次第である。

なお、本稿で扱う資料のうち、下村宏日記の記述と能高駐在所客室の画帳の情報についてはすでに紹介済みのものであることをお断りしておきたい。今回新しく検討に加えるのは、一九二〇年当時下村宏の秘書官を勤めていた石井光次郎（一八八九〜一九八一）の日記に残された春夫の消息である。新出資料どうしを照らし合わせる作業から、春夫の台湾での失われた足取りについて、何が見えてくるだろうか。

## 二 能高駐在所への置土産

出発前から台風に翻弄された春夫の旅は、出発後も思うに任せたものではなかった。嘉義に来て鉄道の破損状況から阿里山登山を断念し、駒を先に進めて二八水（現二水）から日月潭を目指したものの、やはり線路の損壊で途中の集集に一泊しなくてはならなくなった（「旅びと」『新潮』一九二四・六）。その上集集では、〈霧社の蕃人蜂起の事を聞いて、前程にまた新しい障害の生じたのを知り、この蕃情を知るために予定外の日を日月潭で宿泊する事になつた〉ともある（「かの一夏の記」）。

文中にいう〈霧社の蕃人蜂起〉とは、正しくは霧社北方のサラマオにおける原住民の叛乱を指す。作品「霧社」〔『改造』一九二五・三〕によれば、日月潭から埔里、霧社へと進む過程で叛乱の状況が次第に分かり、能高越（中部台湾横断道路）を行く登山には幸い支障もなかった。だが、今度は靴擦れの痛みで霧社滞在が延び、台中に來たあとも、森が勧めた鹿港見物のほかに、台中州知事（加福豊次、一八七六〜一九二二）主催の晩餐会に出席したり、近傍の名士呂汝濤（一八七一〜一九五一）や林猷堂（一八八一〜一九五六）を訪問したりしたために（「殖民地の旅」『中央公論』一九三二・九〜一〇）、ここでも旅程は延長して結局

森のプランは大幅に変更されたことになる。

さて、「サラマオ事件」の第一報は『台湾日日新報』の場合九月九日に初めて紙面に現れる。この時点では〈詳細尚取調中〉と簡略だったものが、翌二〇日にはやや詳しく、事件発生は九月一八日午前一時頃、霧社北方九里にある合流点分遣所が焼討ちされ、正午には柵岡駐在所も襲われたと出る。さらに二一日には、合流点分遣所の犠牲者七名と行方不明者一名の名が公表され、その後は討伐隊の活動が連日紙面に踊るようになる。

ここで重要なのは、第一報の記事に〈十八日台中電話〉とある部分で、叛乱発生が即日台北に伝えられていたことである。これで附近の警備隊には警務局理蕃課から照会や集結の命令がなされることになるから、集集にも同じ日に情報が入ったことは疑いない。春夫が隣室の話し声から事件を知った日付は（「霧社」、九月一八日と考えてよい）。

蜂矢宜朗は作品「霧社」に関連する部分のみの推定表を早い段階でこの情報から作成し、邱若山の推定表にも影響を与えている。本論でもこの前提を共有したい。すると、打狗の出発日にも異論を挟む余地はなくなる。阿里山に登るつもりで〈嘉義といふ町へ行つたのだが、嘉義で無駄に二日泊つて、朝の五時半ごろに汽車でその町を出発した〉（「蝗の大旅行」『童話』一九二二・九）。これが九月一八日

の朝の出来事だと分かるから、打狗の東家を出発したのは九月一六日と逆算される。北行の縦貫線に乗れば、打狗から嘉義まで通常三時間半。まず営林局嘉義出張所を訪ねて鉄道の状況を問い合わせ、嘉義の街中を散策することもできる。(無駄に二泊)と言うが、嘉義滞在中には森の勧める北港の媽祖宮(朝天宮)にも参詣したので(「天上聖母のこと」『三田文学』一九二六・九)、決して時間を持って余っていたわけではない。朝天宮参詣は九月一七日、東洋製糖北港線で片道約一時間二〇分の往復。二泊の投宿先は「噴水」広場に面した老舗の嘉義ホテルであろう。

九月一八日の嘉義発は、時刻表では五時だが汽車の出発が遅れたらしい。縦貫線を北上、約一時間半で二八水(現二水)に着く。そこから(某砂糖会社の私線鉄道)すなわち明治製糖中央線に乗って満仔(現名間)で下車。しかし濁水溪が氾濫して川に沿った線路が洗はれて仕舞つたとのことで二十町ばかり歩かされて、また汽車を乗り継いだという。そして満仔から台湾製糖埔里社線<sup>11</sup>の台車に乗れば、新年庄で降りて日月潭まではさほど苦もなく移動できたはずだが、やはり(台車の線路がさんざんにこわされてゐる)ため、午後二時頃集集に足止めとなった(「日月潭に遊ぶの記」『改造』一九二一・七)。「サラマオ事件」の噂を耳にするのはその晩である。宿は清水溪に面した南洋館か集集

館だろう。<sup>12</sup>

さて「サラマオ事件」発生の九月一八日より後の部分が、峰矢説と邱説で意見が分かれてきた部分である。これに關して最近、私は(惜字塔)と署名のある山岳紀行文「能高越」(『ゆうかり』一九二七・一)の中に、春夫の能高駐在所宿泊日を確認する記述があることを発見した。<sup>13</sup>惜字塔とは、孤羊とも号した台湾の俳句愛好家・三上武夫(一八八三〜一九四〇)のことである。三上は山岳紀行にまつわる文章と俳句を数多く残しているが、「能高越」は一九二六年一〇月初旬の台湾山脈横断旅行を叙したもので、そのルートは台中発霧社泊(一日目)、ポアルン、トンバラ、尾上の各駐在所で休息しながら能高駐在所泊(二日目)、寄萊主山南峰を登頂後、再び能高駐在所に戻り(三日目)、東能高、寄萊溪を経て坂辺駐在所泊(四日目)、最後は花蓮港庁(東海岸)の初音に下山するという五日間の行程だった。

能高駐在所は「霧社」にも(立派な檜造)とみえる御殿風建築だったが、(恐らく佐久間総督のために築造されたものであらう)と春夫が言うのは誤りで、一九〇九年に原住民の軍事制庄を目的とする「五箇年理蕃計画」を開始した佐久間左馬太(一八四四〜一九一五)の指揮による一九一四年の太魯閣戦役<sup>タロコ</sup>当時にはこの建物は存在しない。

これはその攻略時の山間ルートを中央横断道路として一九一八年に整備した際、帰順した原住民に労役を課して作らせたものである（図1）。この駐在所はスレートの厚い擁壁に囲まれ、八畳間二室の豪華な客室に檜風呂まで備えていたが、三上は客室に置かれた宿泊記念帳の中から、六年前ここを訪れて佐藤春夫が残した筆跡を発見している。

客室には画帳が備へてあつて宿泊した人の誰も彼もが書いて今は一頁の余白もないが、披見するにあまりに勝手な落書帳のやうな有様に終つてゐる。雄大とか神秘とか山霊に触れるとか言ふけれども真にその心の現はれてゐる文字は誠に稀である。然し（本是山中人、大正九、九、二二）佐藤春夫、とあるのは実に私共に教へられる所が少くないこと、思ふ。

春夫は後年にも、〈都門にあつて電燈の華やかな果物屋の片隅に栗の実を見出すとき、私はいつも郷愁に打たれる——本是山中人〉（九月―懐かしい栗の実」『キング』一九二九・九）、〈本是山中人——わたくしは田舎者である〉（『窓前花』一九六一・五、新潮社）などと自称することを好んだが、文言は芥川龍之介からの借用である。一九一七



【図1】「檜御殿」と称された能高駐在所宿泊所の絵葉書（筆者蔵）。春夫は1920年9月22日に宿泊し〈本是山中人〉と書き残した。

年六月二十七日、芥川の第一短篇集『羅生門』の出版記念会が京橋南伝馬町のメイゾン鴻の巣（一九一六年一〇月二三日移転開業。旧住所の日本橋と誤記する文献が多い）で開かれ、春夫も発起人の一人として列席したとき、店主が持ち出した大きな画帳に六朝体まがいの字で芥川が揮毫した言葉であるという。春夫はその折の光景を追悼文「芥川龍之介を憶ふ」（『改造』一九二八・七）や『わが龍之介像』（二九五九・九、有信堂）のあとがきで回想している。いかにも都会人らしい芥川が〈山中人〉を名乗ったことがよほど印象深かったらしく、記念会の三年後ひそかに台湾の山中で芥川を摸倣したのはいたずら心か、あるいは屈託の表現だろうか。この旅が作家活動の継続も危ぶまれる鬱屈をやわらげるために行われたことを考えると、能高山中のランプの下で一人、芥川の華々しい栄光の一日を思い起している春夫の複雑な心境が偲ばれる。

それにしても、このひそかな置土産が、六年後の登山客の筆で幸か不幸か散逸を免れたのはまさに歴史のいたずらであろう。というのも、檜御殿の異名を取った能高駐在所は、三上の宿泊からさらに四年後の一九三〇年一〇月二十七日、霧社公学校の運動会を襲った日本統治期最大の原住民蜂起事件である「霧社事件」が展開される中で、同日午後三時には猛火に焼かれ、後には一物も残さず灰燼に帰した

からである。<sup>15</sup>

春夫の書付けは三上がいなければ歴史の闇に消えたはずだった。しかし偶然にも守られたその内容から分かるのは、春夫の宿泊日が九月二二日だったことである。集集の出発後、日月潭、埔里、霧社を経由して翌日能高駐在所に到着する経路だから、日数を数えれば二二日は到着日の日付であり、出発日ではあり得ない。ここから再び日付を辿り直せば、一九日日月潭泊、二〇日埔里泊、二一日霧社泊、二二日能高駐在所泊が確定する。

この推定は現在一般的な邱若山の二三日泊説と一日のズレを生じるもので、結果的には蜂矢宣朗説を支持するものである。両者の相違は日月潭の宿泊日数を二晩とするか（邱）一晩とするか（蜂矢）によって生じている。「旅びと」では一晩で宿を後にしたようにしか読めないが、先述のように、春夫は別の所で〈蕃情を知るために予定外の一日を日月潭で宿泊する事になつた〉とも書いている（「かの一夏の記」）。蜂矢説は前者を、邱説は後者を証拠として採用した。邱説の強みは、能高から霧社に戻った日について（仲秋十三夜であつたことは疑い<sup>ニ</sup>ない）とする「霧社」の記述との整合性である。確かにこれは能高出発日が九月二四日（旧暦八月二三日）だったことを意味している。そのため、蜂矢のちに邱説に大枠では同意を示したが、〈蕃情を知

るため」には、日月潭で泊るより埔里に直行する方が早道」ではないかと、日月潭二泊の説には首をひねっていた。<sup>16</sup> 上の資料は、日月潭滞在が一泊だったことをはっきり示している。

この資料が発見されたいま、「霧社」の日付の信憑性を問題にせざるを得なくなった。「霧社」には先の引用に続けて、「台中市に入る前夜、無名の山駅で名月に遭遇したのだからそれが当時の日附の代りになる」とあり、「殖民地の旅」にも「集々街から日月潭を経て埔里社に到り、蕃情不穩の霧社より能高に登つて再び埔里社に帰り、その附近の無名の山駅でこの年の名月を賞した」と書かれている。だが、能高宿泊が一日早まれば、「無名の山駅」への到着も九月二五日（旧曆八月一四日）と一日早まることになり、十五夜の月は台中で見た計算になる。飽くまでも春夫の記述を信じるなら、霧社三泊か、最後の一泊を埔里泊とするか、いずれかを想定して邱説から除いた日月潭の二泊目をこちらに廻す必要がある。この不都合を意識してか、蜂矢説は二四日までしか推定を行っていない。

結論から言うと、この空白の一夜を補う必要はないと本稿では考えたい。そもその間違いは春夫の曆の記憶にあり、霧社の丘で少女と月を見上げたのは「仲秋十三夜」ではなく旧曆八月一二日（九月三日）、春夫が「無名の山駅」

で「十五夜」だと思っていたのは、本当は旧曆八月一四日（九月二五日）の月だったのではないか。台中の街中に出て月を見るよりは、無名の山駅で名月を見ることにした方が、山を行くこの旅には神韻纏綿たるロマンが生まれる。もしかしたら、それは意図的なフィクションだったかも知れないのである。

思い切ってこの説を唱えるのには動かしがたい一つの根拠がある。春夫の記憶に従って台中到着を九月二七日（旧曆八月一六日）とする場合、「殖民地の旅」に見える記事の所要日数から、阿罩霧<sup>アダム</sup>（現霧峰）の林猷堂訪問は一〇月一日となる。だが果たして、当日多忙だったはずの林猷堂に春夫をもてなす時間があったかどうか。地方自治制度施

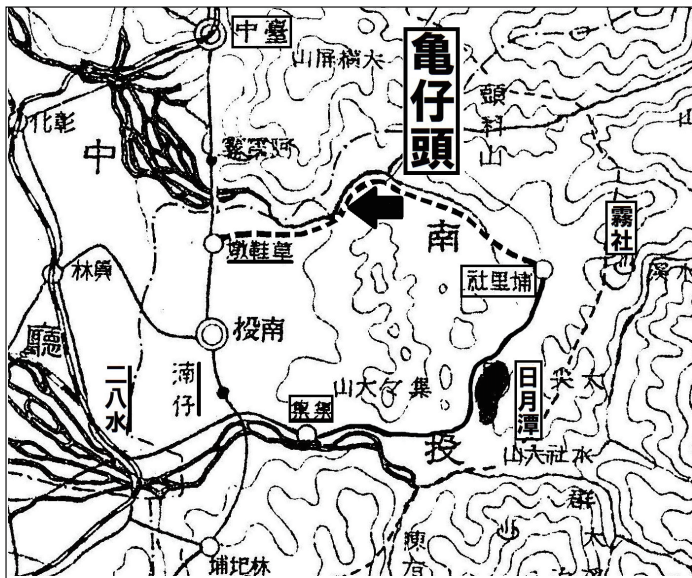


【図2】「台湾地方自治創始記念繪葉書」1920年10月1日発行。デザインは蜂谷彬。（筆者蔵）



行第一日目のこの日〔図2〕、台中州協議会員は台中州庁舎会議室に召集され、午前八時から台中州長加福豊次による総督告諭の朗読を聞いた。これに対して協議会員代表からの答辞があり閉会。その後、市役所での市制施行式典、郡守・街庄長の任命式、台中神社参拝といった行事が一時半まで続いた。むろん祝賀会もあり、州市合同開催で午後六時に台中公会堂で挙行された。台中州協議会員だった林献堂が行事を欠席することはあり得ない。もともと、午後の公式行事は記録されていないが、祝賀会までの間に自宅に戻り、のんびり庭園を案内して、再び台中に戻ったとも考えにくい。台中州雇員の許媽葵の立場から、佐藤春夫のためにそれを強いて頼むことも難しかっただろう。またこの日、全島の駅名変更があり、帝国製糖中南線の阿罩霧駅が霧峰駅と改称されたことに春夫が一言も触れていないのは不可解である。一〇月一日説に対してはほかにも、台北到着日の観点から疑義を呈する余地があるが、それは次節に改めて論じていくことにしたい。

ところで、春夫がいう（無名の山駅）とは一体どこなのだろうか。平時であれば、埔里から集集、湳仔を経由し二八水から縦貫線で台中に到るルートも考えられる。だが、台湾製糖埔里社線の破損で、すでに春夫は集集に足止めを経験していた。このルートを使うなら長距離の徒歩移動を



〔図3〕 龜仔頭（矢印）は埔里から草鞋墩に抜ける埔里街道の山駅。原図に武内貞義『台湾』上（1914.7 台湾日日新報社）付録地図を使用。

覚悟しなくてはならない。それよりも、南港溪に沿って裏南投を西に抜けるルートを使った方が台中には出やすいだろう。土城まで歩き台中軽便鉄道（台車）の草鞋墩（現草屯）で帝国製糖中南線に乗り換えるというものである。こ

のうち（無名の山駅）に当たる小集落を裏南投ルートに求めるなら、当背中継所として利用された亀仔頭（現福龜）が有力な候補となる（〔図3〕）。一九一四年五月一日、太魯閣討伐に向かう佐久間総督一向は、亀仔頭から七里（約二八キロ）、所要時間八時間半の距離を一日の行程として埔里の日月館に泊まった（六年半後に春夫が泊まった部屋である）。春夫の場合これに霧社から埔里までの距離が加わる。もっとも、この長い道のりを痛めた足で辿るには、埔里から轎（駕籠）を雇ったと考えるのが現実的かも知れない。

### 三 台北到着日の疑問——石井光次郎日記より

さて、台中での行動日程を考える際には、台北到着日を視野に入れる必要がある。その参考になるのが、下村宏総務長官（旧称民政長官、在職期間一九一五・一〇～一九二一・七）の一九二〇年一月二日の日記（国立国会図書館憲政資料室蔵）である。二行目に、〈佐藤春夫 森丑之助〉とある書付けは、すでに『佐藤春夫読本』（二〇一五・一〇、勉誠出版）一一五頁に紹介しておいた。三行目に〈登庁〉とあることから、春夫の訪問時間は午前中、恐らくは森丑之助に伴われて、台湾総督府庁舎正面に

あった総務長官の官邸に現れたのだろう。台北に無事安着の報告と、途中の手厚い保護に対する感謝を述べたものと思われる。打狗で実現しなかった下村との会見は台北で果たされた。

これを裏付ける記述が、下村宏の秘書官を務めていた石井光次郎の日記（国立国会図書館憲政資料室蔵）から見つかった。石井光次郎は一八八九年生まれ。一九二〇年当時は数えの三二歳。一九一四年、東京高等商業学校卒業。警視庁保安部を経て、台湾総督府総督秘書官兼参事官（在職期間一九一五・一二～一九二二・五）。下村の抜擢による人事だった。一九二二年二月から辞職まで欧米出張ののち、退官後は朝日新聞に入社して、官界から民間に転じたあとも長く下村の懐刀であった人である。一九四六年、日本自由党から政界入りを果たし、のちに自民党石井派を率いる重鎮として、運輸大臣、副総理、通産大臣、法務大臣等を歴任した。

森書簡にも、〈予て下村長官は台湾紹介の爲め著名文士優待の意思あり其部下に在る石井秘書官も此意を承け此側に尽力する筈〉（八月二六日付）と見えている。春夫が旅行中、総督府の賓客としての待遇を受けられたのは、同郷和歌山の出身で海南の号を持つ歌人でもあった下村の優遇策によるもので、その実務を担当したのが石井だったので

ある。森書簡には他にも、(過日先生(註・春夫)の御来台のこと並に御旅行のことにつき石井秘書官や豊原君(註・秘書室属官の豊原瑞穂)の耳に入れ置ました) (先生の御旅行に対し出来得る限り尽力させたいと存まして石井豊原両氏とも打合せてあります) (先生が台北に御帰着の節(註・下村への)御紹介方石井氏まで頼み置ました) (八月二十六日付) (下村氏石井氏とも貴下の旅行を欲び十分の御視察を望んで居られます) (八月三十一日付二通目) などと、石井の名は数多く登場する。その彼が佐藤春夫の記事を次のように日記中に残していたのである。

一、佐藤春夫——永く高雄に滞在のところ、此頃上京、森丙午の宅にありとて、来る。面永の詩人らしき感じを持てる男なり。

蜂屋に紹介、後ち西口に紹介して、今夜ホテルに催さる、「南方芸術社」発会の祝賀音楽会に話しをしてもらふ事になれり。(一九二〇年一〇月二日)

一、佐藤春夫の作を一向読むだ事がないから一二冊かりてみる。「指紋」といふのが評判なそうなが、面白かつた。(一九二〇年一〇月二日)

一、佐藤春夫と、成富公三郎君を見送るつもりで停車場に行つたが二人とも居なくて大毎社の鹿倉君が発するのを見送つた。(一九二〇年一〇月五日、傍点・傍線はいずれも原文通り)

森丑之助の同行について言及がない点が気になるもの、春夫が一〇月二日に総務長官官邸を訪問したことには疑問を挟む余地はなくなつた。旅行直後の風貌が(面永の詩人らしき感じ)と伝えられているのも興味深い。今でこそ不思議はないが、当時はまだ「田園の憂鬱」(『中外』一九一八・九)の小説家として成功したばかりで、広く詩人の名を謳われるのは『殉情詩集』(一九二一・七、新潮社)以後のことである。石井の慧眼を物語るものか春夫がそう自己紹介したのか。

もう一つの収穫は、南方芸術社主催の音楽会における飛び入り講演の内幕が詳らかになつたことである。この事実を紹介した本連載の最初の段階では、西口進卿(紫溟、一八九六〜一九七七、台湾新聞社台北支局員)との関係のみに注目していたが、この依頼にももう一つ裏側があつたのである。台湾新聞社からは廈門旅行の前借りをしており、石井には旅行中多大な恩恵を受けている。これではさすが

の春夫も断りづらかっただろう。もともと、森はすでに〈長官は貴下が御着北の〔際〕台湾教育会の為に一場の御講演を願ひ度思召の様です〉(九月二日)と書き送っていたから、予定とは少し違った形で約束の講演が実現したという言い方もできる。

さて、旅程との関係で注目されるのは、〈此頃上京、森丙午の宅にあり〉とある二日の日記をどう見るかである。邱若山は、一〇月一日に林猷堂と会见し、その日の夜行か翌日(二日)の移動で台北に着いたと推測している。当時の時刻表によれば、午前五時二五分の始発に乗ると、一一時二三分台北着である。長官官邸の到着は昼頃になる。夜行であれば午前二時三〇分台中発が七時二分台北着である。これなら朝のうちに訪問することは可能だが、朝着いたばかりの春夫について、〈此頃上京〉と書き残すのはかなり不自然である。〈宅にあり〉という表現も一度森の家に落ち着いたという含みを持つ。この日記の記述もまた、林猷堂との一日会见説(二日台北到着説)を否定するものではないだろうか。

やはり、春夫が言う名月鑑賞の日付には記憶違いか虚構があり、それに囚われずに作中の記事を単純に数えるのが正しいようである。「サラマオ事件」発生の九月一八日を集集泊と定め、書かれた出来事のみを時系列にそって並べ

て行けば、その旅程は能高駐在所の画帳の日付とも、林猷堂のスケジュールとも、石井光次郎日記の文言とも特に齟齬をきたすことはない。すなわち、九月三〇日に林猷堂を訪問、台中に戻って一泊。一〇月一日は余裕をもって縦貫線に乗り、地方自治制度施行初日の祝賀ムードに湧く台北に到着。森丑之助の家に旅装を解いて土産話に花を咲かせ、翌朝総務長官官邸を訪れて無事の到着を報告する。春夫の行動が自然な流れとして理解できるようになる。

森のプランの謎は、未明の二時半に出る夜行に乗るよう指示している点だが、そこまでして春夫が台北に急ぐ理由が見当たらない。宿代の節約を考へてのことだろうか。延期されていた下村長官の中南部巡視は一〇月四日台北発と決まった<sup>22</sup>。それまでには余裕があるため、これも夜行を使う理由とはならない。不確かな点は残るが、本稿では仮に台北入りを昼間の移動と考へておく。いずれにしても、台北到着が一〇月一日であることに変わりはない。

#### 四 新資料にもとづく旅行日程の復元

それでは、春夫の旅をさしあたり九月一六日打狗発、一〇月一日台北着の行程と見て、縦断旅行の全体像を日記風に整理してみよう。鉄道路線名や施設名、経路など、

一九二〇年当時の現地の状況が分かることについては、春夫が明記していないことでも極力補って記すことにした。その方が、紀行文と歴史との接点が明確になり、春夫の旅の実況を、同時に虚構や勘違いを、よく把握できるようなると考えたからである。関連人物については別稿を用意しているのを名を示すにとどめる。なお、所用時間で（春夫）とあるのは春夫の記述に頼った部分である。汽車の時刻表を用いた部分も、春夫の旅行時は水害の影響が残っていた時期であり、むしろ実際とは異なる可能性があることは否定できない。

#### 一九二〇年佐藤春夫旅程（推定）

九月一六日 木曜日（旧八月五日）打狗↓嘉義

東熙市一家に別れを告げ、打狗から縦貫線を北上、嘉義に下車（所用約三時間半）。營林局嘉義出張所を訪問、阿里山鉄道の被害状況を確かめる。嘉義ホテル泊。

九月一七日 金曜日（旧八月六日）北港往復

東洋製糖北港線で北港に至る。七時発なら八時二四分着。一一時三五分発なら一二時五七分着。北港朝天宮（媽祖廟）に参詣。乾隆、道光、光緒諸帝、佐久間左馬太元台湾総督奉納の扁額などを見る。二時三五分発

の汽車で三時五六分嘉義に戻り、嘉義ホテル泊。

九月一八日 土曜日（旧八月七日）嘉義↓集集

朝五時半ごろ（蝗の大旅行）嘉義を出発（時刻表通りなら五時か七時二〇分）。縦貫線を北上、二八水下車（所用約一時間半、時刻表の発車時間は六時二九分、八時五二分。「日月潭に遊ぶ記」では「十時ごろ」。「旅びと」では「九時すぎ」）。明治製糖中央線で浦仔へ。線路破損のため途中徒歩連絡。台湾電力職員の出迎えを受け、浦仔から台湾製糖埔里社線（台車）で集集へ。線路破損のため先に進めず、午後二時頃到着（「日」。「旅」では三時）。南洋館または集集館泊。「サラマオ事件」（一八日午前一時発生）の第一報を聞く。

九月一九日 日曜日（旧八月八日）集集↓日月潭

七時（「旅」）、台湾電力職員の案内で「椅子駕籠」に乗り出発。土地公鞍古道（水沙連古道）を進み、正午（「日」）、時の土地公廟前で弁当を使う。三時頃（「旅」）、日月潭水社着、涵碧楼に投宿。夕方から湖上に出て対岸の石印社に「化蕃」の舞踊を見る。宿の女中の身の上話に哀れを催す。

九月二〇日 月曜日（旧八月九日）日月潭↓埔里

朝、水社発。台湾電力職員の案内。「椅子駕籠」で魚池から台車道（台湾製糖埔里社線）に沿って埔里へ。

能高郡役所（旧南投庁埔里支庁）で霧社・能高方面の安全を照会。埔里街倶楽部内の物産陳列所<sup>24</sup>で蝶の標本などを参観。日月館泊。部屋は佐久間元総督のため新築された特別室。

九月二日 火曜日（旧八月二〇日）埔里↓霧社

埔里より埔眉軽便鉄道（台車）で眉溪へ。台湾電力職員の内。所用二時間（春夫）。掛茶屋の女房から「サラムオ事件」発生時の噂を聞く。霧社まで約六キロを歩く。【三十丁ぐらゐ】は誤り（「霧社」）。霧ヶ丘倶楽部に投宿。台中州能高郡警察課霧社分室（旧南投庁霧社支庁）を訪ね、情報入手と能高への警護依頼。分室附属の「蕃産品交易所」参観。「蕃語通弁」の異様な風采の女を見る。鎮圧隊一小隊到着。軍人一〇人同宿、部屋を移される。

九月二日 水曜日（旧八月一日）霧社↓能高

八時、支度して「霧社蕃人公学校」を参観。八時半、武装警官および二名の「蕃丁」と能高に出発（行程約三〇キロ）。中間点（トンバラ駐在所か）で武装警官と「蕃丁」一名が帰り、能高から来た少年警手に交替。夕方、能高駐在所に到着。同駐在所に宿泊（海抜二八六〇メートル）。客室の画帳に（本是山中人）と書き残す。

九月三日 木曜日（旧八月二日）能高↓霧社

朝、少年警手と通送夫に連れられて州庁界（台中州と花蓮港庁の境界）に至り、郵便物交換引継に立ち合う。殉職した通送夫アウイワタン（一九一八年一〇月五日、凍死）の記念碑を見る。能高駐在所で朝食、霧社に戻る。途中靴擦れの痛みに悩み、日没頃霧社着。霧ヶ丘倶楽部泊。駐屯中の一箇中隊の分宿で部屋は満室。八時頃、興奮した原住民の騎馬戦を見る。原住民の二人の少女に誘惑され恐怖を感じる。片方の少女と桜台で月を見上げる。【春夫の〈仲秋十三夜〉は虚構か（「霧社」）】。

九月四日 金曜日（旧八月三日）霧社

足まめのため歩行困難になり休息。霧ヶ丘倶楽部泊。夕方、昨夜の少女二人が歩き去るのを見る。

九月五日 土曜日（旧八月四日）霧社↓亀仔頭

朝、霧社を發ち、眉溪まで約六キロを歩く。埔眉軽便鉄道（台車）で埔里へ。夜、亀仔頭（推定）に着く（輪を使用か。所用八時間半）。宿泊先未詳<sup>25</sup>。美しい月を見る。【春夫の〈十五夜〉は虚構か（「霧社」）】。

九月六日 日曜日（旧八月五日）亀仔頭↓台中

朝、亀仔頭（推定）を發つ。土城まで徒歩または輪。台中軽便鉄道（台車）で草鞋墩へ。帝国製糖中南線に

乗り換え、二時三〇分発の汽車で四時二分台中着。春田館泊。西日が差し込む部屋に閉口。台中州庁に電報を打ち到着を報告。

九月二七日 月曜日(旧八月一六日) 台中

一〇時頃朝食。台中州雇通訳・許媽葵(〈A君〉)が案内人として来る。州知事による歓迎宴への招待を受け、午頃招待状が届く。車の迎いで六時半より州知事官邸の晩餐会に出席。午後一〇時、台中新聞社の(〈B君〉)と退席、台中公園を一巡し香園閣でビールを飲む。深夜零時、(〈B君〉)と芸妓に送られて春田館に戻る。二階の特別一等室に部屋替えされる。

九月二八日 火曜日(旧八月一七日) 鹿港往復

早朝起床。五時三〇分頃(推定)に許媽葵来る。朝食を済ませ五時五五分台中発、六時二七分彰化着。八卦山に登る。【春夫の(〈八景山〉)へ乗り換へまでに三十分は誤りで、駅から距離がある(「殖民地の旅」)。】八時五〇分発の新高製糖鹿港線に乗り九時三六分鹿港着。街上、許媽葵の友人・洪炎秋(一八九九〜一九八〇)と遭遇。鹿港天后宮参拝。炎秋に依頼しておいた漢詩人の父・洪棄生(一八六六〜一九二八)との面会は謝絶されるが、三人で書家・鄭貽林(一八五九〜一九二七)の書草堂(鹿港龍山寺入口)を訪ねる。鹿

港一二時発なら、彰化一二時四六分着、同一時一分発、台中一時三六分着。鹿港三時三〇分発なら、彰化四時一六分着、同五時発、台中五時三四分着。春田館泊。

九月二九日 水曜日(旧八月一八日) 葫蘆墩(現豊原) 往復

一〇時過ぎに許媽葵来る。洪棄生の『寄鶴齋詩贊』(一九二七、南投活版所)を贈られて読む。春田館で昼食。一二時三八分台中発の縦貫線に乗り、一時一六分より前に葫蘆墩着。一時間以上道に迷う。二時過ぎ三角仔(現三角里)の筱雲山荘に画人・呂汝濤を訪ね、迎賓閣で早めの夕飯をふるまわれる。五時五七分葫蘆墩発、六時二六分台中着。春田館泊。

九月三〇日 木曜日(旧八月一九日) 阿罩霧(現霧峰) 往復

一〇時半までに昼食を済ませ、一〇時四〇分台中発の帝国製糖中南線に乗り、一一時三〇分より前に阿罩霧着。【春夫の(〈十一時二十何分だかの汽車〉)は到着時間か。所要時間(二十五分やそこら)は誤り(「殖民地の旅」)。】馬上の林資彬(一八九八〜一九四七)に会う。「本島人」の権利請願運動を担う林猷堂を訪問。【林熊徴】は誤り(「殖民地の旅」)。(「村役場かとも思へる建物」は自宅の景薰楼ではなく願圃か。三時頃(春夫の推測)、舞台のある大花庁の裏手から菜園(林

家庭園)に導かれる。夕佳亭に休む。再び頤圃(?)に戻り懇談、談話を警察に監視される。阿覃霧発の中南線は、三時一九分を逃すと七時発まで汽車がない。前者なら四時二分、後者なら七時四六分台中着。春田館泊。

一〇月一日 金曜日(旧八月二〇日) 台中↓台北

台中発、縦貫線で台北着。一〇時三〇分発四時四七分着または一時四五分発六時一五分着の汽車が適当か。台中も台北も地方自治制度施行にともなう州・市誕生の祝賀気分満ちていた。森丑之助が勤務する総督府博物館裏手の新公園には楽隊の演奏があり、六時五〇分、武藤針五郎市尹の万歳三唱を合図に市制施行を祝う市民の提灯大行列が発発、台湾総督田健治郎(二八五五〜一九三〇)、総務長官下村宏が歓呼に応える総督府前を通過し、九時過ぎに台北市役所前で解散。新聞報道の見出しには、〈一箇師団に余る大集団／約一里に亘る大火列の壯観〉〈宛然火の海の如く／万歳の声天地を震撼す〉などとある。春夫も森とともに見物しただろう。市内龍匣口の森宅に到着、旅装を解く。

一〇月二日 土曜日(旧八月二一日) 台北

朝、総務長官官邸を訪問。石井光次郎秘書官に無事到着の報、寄寓先を伝える。下村宏に面会、感謝の意を

表す。石井より文書課の図案家・蜂谷彬および台湾新開台北支局の西口進卿に紹介され、講演を引き受ける。六時半、鉄道ホテルで南方芸術社音楽会開催。春夫、約束通り壇上に立ち、〈自分は時々世の中がいやになるが、その時はぢき逃げ出して旅をすることにしてゐる〉などと述べる。<sup>27</sup>一〇時半散会、森の家に帰る。

この旅程によれば、春夫は一六日間に及ぶ旅の最後に、台北市制施行を祝う市民の熱狂の渦に巻き込まれることになる。地方自治制度施行は、従来の台湾の行政区分を内地と同一のシステムに再編するという意味で、総督田健治郎(在職期間一九一九・一〇〜一九二三・九)が推進していた「内地延長主義」の具体的な実現であった。それは確かに総督府に統治権力を集中させた一八九六年以来の「六三法」見直しの機運を作り、大正デモクラシーを体现する初の文官総督にふさわしい一つの成果であったが、一方では、行政単位名を一新する名目で多数の地名を内地風に改称するような文化的「同化」の強要を意味する側面もあった。

「殖民地の旅」の会話内容が事実ならば、佐藤春夫は台北に来る前日、〈自分の高い自負を捨ててより低い文明に同化することは人間の本性として肯ぜぬところであります〉と林猷堂に断言されたばかりだった。その言葉がいま



だに耳朶に響くのを覚えながら、春夫はこの晩の提灯行列をどのような気持ちで眺めやったのだろうか。

各地の浮かれ騒ぎの一方で、「サラマオ事件」の掃討戦はますます殺気立ち、警察航空班による山地爆撃がよいよい一〇月三日から始まろうとしていた。肩を並べて立つ森丑之助の心中も穏やかではない。軍事力に恃んだ原住民の制圧が決して好結果を生まないことを、これまでにもさんざん唱えてきたが容れられなかったのが森だからである。

一九二〇年一〇月一日の夜、台北の目抜き通りを埋め尽くした群集の万歳を叫ぶ歓声の中に、浮かない表情で取り残された二人の男がいただろう。いまこうして旅程表をまとめてみると、遠い日の彼らの屈託した横顔が、歴史の闇の中から朧ろに浮かんでくるような気さえするのである。

**付記** 本稿を草するにあたり、国立国会図書館憲政資料室には貴重な石井光次郎日記の閲覧の便宜を与えられた。記して深い謝意にかえたい。

本稿中に、台湾の先住民族を「原住民」と称したのは、現在当事者が誇りをもって唱える自称がこれだからである。その他の呼称は歴史的文脈での説明に限っての使用であることを了解されたい。

なお、本稿はJSPS科研費18K00289の助成を

受けた成果の一部である。

## 注

1 新宮市立佐藤春夫記念館編『佐藤春夫宛 森丑之助書簡』（二〇〇三・三、新宮市立佐藤春夫記念館）。牛山百合子翻刻中の二か所の未読箇所（岩澤枝〇）六頁および（新元枝〇）一六頁）は、それぞれ岩澤技師（営林局嘉義出張所技師・岩澤潔）、新元技師（台湾総督府鉄道部技師・新元鹿之助）と読める。

2 「低気圧は頗る猛烈だが▽八重山と沖繩の間を北に外れ本島は無事ならん（台北測候所長談話）」（『台湾日日新報』一九二〇・九・三、七面）。

3 「昨夜来の風水被害▽諸川氾濫、交通杜絶、電線切断、家屋倒潰」（『台湾日日新報』一九二〇・九・四、七面）、「烈風の咆哮物凄く猛雨車軸を流すが如し／暴風来！暴風来！！／交通通信の途絶え台北は孤立の状態となる／近来稀有の低気圧／三十万円の工費で新設した許りの台北橋は流出／汚穢極る泥の海＝水の町／悲惨＝悽愴を極む」（『台湾日日新報』一九二〇・九・五、七面）など。

4 当初は「下村長官出張▲来月六日頃台北発」（『台湾日日新報』一九二〇・八・二九、二面）と九月六日からの出張予定だったが、「長官巡視延期▲暴風雨水害の為め」（同、

- 一九二〇・九・五、二面) ということになり、再度「長官巡視予定▲十二、三日頃出発」(同、一九二〇・九・九、二面)と予定が組まれたが、これも結局延期になる。
- 5 下村総務長官は新制度実施後の状況巡視の爲め中南部に向け十三日台北出発に決定したるも地方の状況に由り来月上旬に延期したりと(「長官巡視延期▲来月上旬出発」『台湾日日新報』一九二〇・九・二二、二面)。
- 6 邱若山「佐藤春夫台湾旅行行程考」(「稿本近代文学」一九九〇・一一)。のち「佐藤春夫台湾旅行関係作品研究」(二〇〇二・九、致良出版社)に収録された。
- 7 「兇蕃分遣所を襲ふ▽詳細尚取調中」(『台湾日日新報』一九二〇・九・一九、七面)。
- 8 「サラマオ遂に反抗／合流分遣所を焼打し▽柵岡駐在所に殺到す▽我が警備員続々戦死」(『台湾日日新報』一九二〇・九・二〇、五面)。
- 9 「妊婦の腹を抉り胎児を誅首す／人間に非ず彼等は野獣なり／サラマオ蕃の兇暴」(『台湾日日新報』一九二〇・九・二二、七面)。作品「霧社」の末尾で、(M氏)(森丑之助)は、(彼等の宗教上に無意義な惨虐を楽しむやうな風習は、彼等の古来の習慣には少しも発見出来ない事実である)と述べ、暗に強引な「理蕃政策」が原住民の価値観を破壊し、無意味な嗜虐に趨らせていると嘆
- 10 いている。この記事を見ての反応だったろう。  
蜂矢宣朗「霧社」覚書—佐藤春夫と台湾—(『天理大文学報』一九七三・三、一七〇頁)。
- 11 「日月潭に遊ぶ記」では(台湾電力会社の台車)とされている。現在の集集線は、台湾電力株式会社により一九一九年起工、一九二二年に竣工した機関車用の路線(外車埕線)で、一九二〇年当時はまだ完成していない。電力会社は台湾製糖の軽便鉄道を共用していたのか、あるいは路線敷設用の仮線路に台車(トロッコ)を使用していたのだろうか。
- 12 南洋館については、八月二日付森書簡に同封された日程表の初稿に見える(残された日程表は二枚ある)。ただ、現地の案内者は台湾電力の職員であるため、森の推薦にかかわらず、集集館の方を勧めた可能性もある。いずれも鈴木常良編『台湾商工便覧(第二版)』(一九一九・一一、台湾新聞社、第四編三二二頁)に見え、場所は至近(現地調査による)。
- 13 新宮市立佐藤春夫記念館編「佐藤春夫没後五〇年国際シンポジウム「佐藤春夫と(憧憬の地)中国・台湾」展に寄せて」(二〇一六・二〇、新宮市立佐藤春夫記念館、四八頁)。
- 14 能高駐在所の建設計画と客室間取りは「四日で花蓮港へ

- 行かれる▽横断道路と駐在所」(『台湾日日新報』一九一八・二・二〇、七面)による。
- 15 「能高駐在所の被害状況」(『台湾日日新報』一九三〇・一〇・三一、七面)及び「大腿部を撃たれ乍ら逃延びた津崎巡查花蓮港で入院して当時を語る」(同、一九三〇・一一・二一、七面)による。
- 16 蜂矢宣朗「南方憧憬―佐藤春夫と中村地平―」(一九九一・五、鴻儒堂出版社、一七頁)。
- 17 「各地の祝賀拳式▲台中」(『台湾日日新報』一九二〇・一〇・二二、七面)による。
- 18 蜂谷彬(一八八四?)。京都高等工芸学校図案科卒業の図案家。当時、総督官房文書課雇で広報図案を担当し、ちょうど蜂谷のデザインによる「台湾地方自治制創始記念絵葉書」が一〇月一日に発行された所だった(図2)。(一九一七年二月には、來台画家石川寅治の南部旅行に随行し、台南大南門で並んでスケッチしたことを報告している。(「マラソン競走賞牌の図案」『台湾日日新報』一九一六・三・二六、七面、「自治記念の絵葉書」/十月一日売出す」同、一九二〇・九・一七、七面、蜂谷生「絵の旅より(上)」同(下)」同、一九一七・三・四、四面・同、一九一七・三・八、四面)。
- 19 佐藤春夫の離台を伝える人事欄記事に一致する。(佐藤春三氏)成富六三郎氏(南国公司)(正しくは公三郎)鹿倉吉次氏(大毎記者)(昨日内地へ)「人事」『台湾日日新報』一九二〇・一〇・二六、二面)。
- 20 拙稿「佐藤春夫の台湾滞在に関する新事実―台南醉仙閣と台北音楽会のこと―」(『実践国文学』二〇一四・三)。
- 21 大淵善吉編「ポケット旅行案内 大正九年十月」(一九二〇・一〇、駸々堂旅行案内)による。以下の時刻表の情報も同じ。
- 22 「下村長官巡視▲来る四日出発」(『台湾日日新報』一九二〇・一〇・二二、二面)。
- 23 固有の文化を保つ「生蕃」、平地に居住し漢族との同化が進んだとされる「熟蕃」に対し、同化の域がその中間とされた台湾原住民に対する当時の呼称。
- 24 一九一六年二月三日、埔里の日月館に宿泊した安東貞美総督は、四日午後(倶楽部内の物産陳列所)を參觀している(「総督埔里社巡視」一九一六・二・五、二面)。展示室の様子は随行者の記事に詳しく、(胡蝶類の陳列が際立つて美しく見えた)とある(白虹生「埔里社随行(七)」『台湾日日新報』一九一六・二・二八、一面)。
- 25 佐久間左馬太総督の太魯閣戦役従軍者の記事に、(八時半亀子頭に著すれば新築の清楚なる小旅館あり、之れ今夜一行の宿営に宛てられたるもの、行李を整へ了はるや

26

庭上に食卓数基を置き小宴を張るビールありサイダーあり台湾料理に舌を打ちつ、空腹を充たす」と見え、亀仔頭には十分な宿泊施設があったことが分かる（然堂「討蕃従軍記（一）」『台湾日日新報』一九一四・五・一七、二面）。

『台湾日日新報』（一九二〇・二・二二、二面）。

27 宮崎震作「はがき随筆 佐藤春夫と南方芸術」（『台湾日日新報』一九三九・五・二六、六面）。

（ここの たつや・実践女子大学教授）